

研究論文

学生の授業外学習を促進する授業 ——2年にわたる授業実践を通して——

吉田 博 金西計英
徳島大学大学開放実践センター

要約：近年の我が国の高等教育における課題の1つに、大学生の授業外学習時間が短いという問題が挙げられる。大学設置基準で定められている単位制度に基づけば、授業外学修を含めて、45時間で1単位とすることが定められている。本研究は、学生の授業外学習時間に注目し、学生の授業外学習を促進する授業を設計、効果検証を行う実践研究である。対象とした授業は、徳島大学で2011年度後期に実施された共通教育科目「情報メディアと教育」で、昨年度から同授業において「橋本メソッド」という授業方法を参考にして授業を実施している。本年度は、昨年度の授業実践から明らかになった改善点を踏まえ、授業設計を行い、授業外学習を促進するための工夫を施した。その結果、昨年度の同時期の同調査に比べ、学生の授業外学習時間が大幅に伸びていることが明らかになった。そこで、本稿では授業内容を報告するとともに学生の授業外学習時間が伸びた要因について考察を行い、明らかにする。

(キーワード：授業外学習、チーム学習、学生主体の授業、成績評価基準の明確化、橋本メソッド)

Teaching to promote students' learning outside the classroom —Throughout two years of teaching practice—

Hiroshi YOSHIDA Kazuhide KANENISHI
Center for University Extension, The University of Tokushima

Abstract: In recent years, one of our country's issues in Higher Education is that students' learning time outside the classroom is too short. Standards for Establishment of Universities decides credit system in which 1 credit is 45 hour study including learning outside the classroom. In this study we design and verify effectively the teaching to promote students' learning outside the classroom with special attention to students' learning time outside the classroom. The teaching for our investigation was general education course "Media Information and Education" in the latter term of 2011 at the University of Tokushima. Our teaching took in teaching method called "Hashimoto Method" in the same class from the last year. In this year we planned teaching to promote students' learning outside the classroom with improvement shown from the practice in the last year class. As a result, it was clear that students' learning time outside the classroom has increased remarkably, compared to the same study of the last year. Therefore, in this paper, we report course contents and disclose primary factors that made students' learning time outside the classroom to increase remarkably.

(Key words: learning outside the classroom, team learning, student-centered teaching, clarification of assessment standards of academic achievement, Hashimoto Method)

1. はじめに

2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」では、学士課程教育における現状の課題、改革の方向性が示されている。その中の1つに単位制度の実質化が挙げられる¹⁾。我が国の大学では授業外学習時間が短い学生が、相当の割合に上ることが指摘されている。また、全国的に実施されている、大学生を対象とした授業外学習に関する各種調査でも、同様の結果が報告されている²⁻⁶⁾。このような状況を踏まえ、単位制度の国際的な通用性の観点から、学習時間の実態を国際的に遜色ない水準にするための取り組みが求められている¹⁾。そのためには、現在の教育

方法の見直し、教育制度の見直しの他に、学生の学習スタイルの実態を掴むこと、学習動機を調査することも重要になってくると考える。

学生の学習スタイルや学習動機に関する先行研究として、以下の事実注目したい。岡田らは、授業環境が学生の学習スタイルにポジティブな変化をもたらすことが可能である⁷⁾と述べている。また、木野によると授業内での教員と学生との双方向のコミュニケーションが学習意欲を高める⁸⁾ことが報告されている。澤田は、能動的な学習動機づけ要因について、教員の授業の工夫や授業内相互作用の取り組みが加わることで、自己の学習についての有意義感や受講満足度が高め

られる⁹⁾と報告している。このことから学生の学習動機を高め、授業外学習を促進させることには、授業設計が大きくかかわっていることが分かる。さらに、溝上は、1週間の大学生活の過ごし方から見た学生像を4つのタイプに分け分析を行っている。その結果、大学生活が日々充実しており、かつ大学生活を通じて自分が成長していると実感している学生のタイプは、他のタイプの学生に比べ、授業外学習、自主学習の平均時間が長く有意差も見られる¹⁰⁾ことが報告されている。このような背景から授業外学習を促す授業設計は単位の実質化を考えるだけでなく、学生の成長の面からも極めて重要であることが分かる。

筆者らは2010年度から、徳島大学で金西が担当している共通教育科目「情報メディアと教育」において大人数双方向型授業「橋本メソッド」¹¹⁾という授業方法を参考にし、学生の授業外学習を促進させる取り組みを実践してきた。2010年度の取り組みにおいては、学生の授業外学習時間が、上述した全国調査で明らかにされている時間に比べれば、長いことが明らかにされており、取り組みの成果として、ある一定の効果があつた¹²⁾ことが報告されている。しかし、2011年度の同授業における調査では、さらに授業外学習時間が伸びている。同授業において授業外学習時間を伸ばすことになった要因と取り組みの内容を明らかにすることは、今後各教員が、自身の授業の中で授業外学習を促進するための授業設計を行う際に、有益な資料となることが考えられる。そこで本稿では、学生の授業外学習時間を大幅に伸ばすことができた授業実践について、授業内容を報告するとともに学生の授業外学習時間が伸びた要因について考察を行い、明らかにする。

2. 大人数双方向型授業「橋本メソッド」とは

「橋本メソッド」とは、富山大学大学教育支援センター教授の橋本勝氏によって開発された、チーム制による本格討論型授業である。授業を履修している学生を3~4名のチームに分け、あらかじめ設定されているテーマの中から、各チーム自由に2つのテーマを選択する。選択したテーマに関してチームで協働して調査・分析を進め、B4

で1枚程度のレジюме案を期限までに作成して提出する。その中から、橋本氏が2チームを選び、5~10分程度の発表を行うが、それぞれのテーマにおいて、数チームによる競合になるため発表できないチームが発生する。また、発表チーム以外の受講生は支持投票により、発表した2チームの勝敗を決める。発表時間が終わると質疑応答に入るが、平均して25分程度の時間を取る。これらの結果は、成績に直結している。さらに、シャトルカードと呼ばれる用紙が、学生と教員との一对一のコミュニケーションのために用いられる(一般的には、大福帳¹³⁾として知られている)。

3. 授業の概要

(1) 対象授業

本研究で対象とした授業は、2011年度後期に徳島大学で金西が担当した共通教育科目「情報メディアと教育」(以下、本授業)である。本授業は、インターネット上でのメディアを中心に、仕組みや特徴について理解し、特に学習との関わりの中で、現代メディアの位置づけについての理解を目指す授業である。メディアに関して、現代社会に存在する問題を様々な視点から考察する内容であるため、答えのない問題がテーマとなる。また受講生が100名を超えていることから橋本メソッドの手法を実践することに適している。そこで、橋本メソッドの授業方法をもとにして、昨年度の改善点を踏まえて授業設計を行った。

(2) 授業方法・進め方

本授業は、橋本メソッドを参考にし、次のように進めた。あらかじめ11のテーマを決め、この中から毎週1つのテーマを取り扱った。受講生は、4人または5人で1組となりチームを結成し、同じチームで毎週、当該週のテーマに対する学習、調査を行い、B4用紙1枚(本授業ではレジюмеと呼ぶ)にまとめた。図1は、学生がまとめたレジюмеである(ただし、チーム名、学生の氏名は削除してある)。結成されたチームは全部で25チームあり、テーマに関する学習、調査はすべて授業外で行うこととした。レジюмеはテーマに関することであれば、まとめる内容について特に指定はしていない。またチームで1枚のレジ

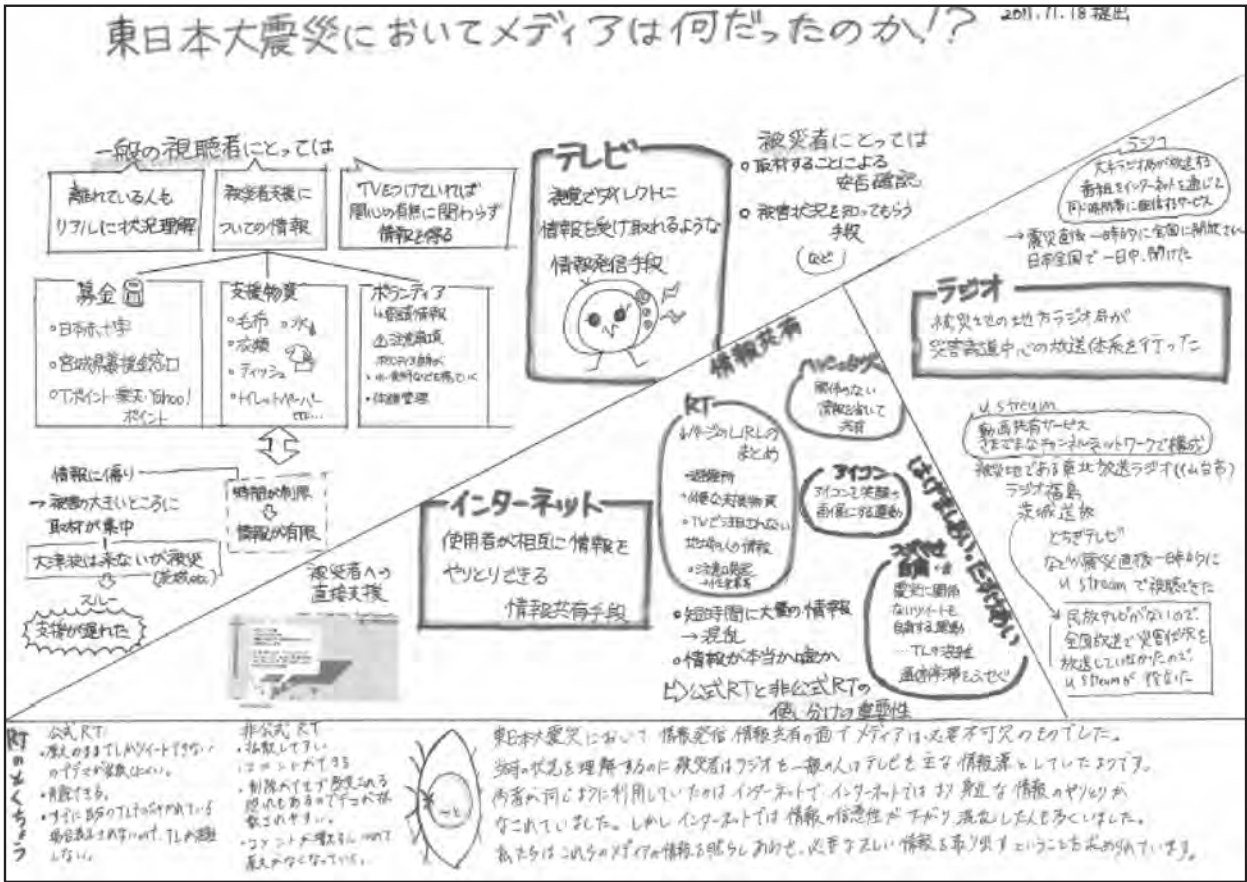


図1 学生が提出したレジュメ

レジュメを作成するため、授業外学習の量は学生の自主性に任せた。本授業は火曜日の1限に実施していたが、レジュメの提出期限は当該テーマの授業が行われる前の週の金曜日17時とした。さらに11のテーマの中から、各チーム自由に2つのテーマを選択（本授業ではエントリーと呼ぶ）し、各テーマについてエントリーしたチームの中から2チームだけが、学習、調査した内容を5～10分程度発表した。表1は、本授業で取り扱ったテーマと、各テーマにエントリーしたチーム数を表している。発表するチームの選抜は、レジュメを参考に筆者らが、調査の内容、質などを判断して行った。各テーマにおいて、数チームによる競合になるため発表できないチームが発生した。発表が終わると質疑応答に入るが、平均して30分程度の時間を取った。発表できなかったチームも選択したテーマについて、発表するつもりで準備をして授業に臨んでいるため、鋭い質問が出ていた。図2～5は発表、質疑応答の様子である。また、

発表チーム以外の受講学生の支持投票により、発表した2チームの勝敗を決めた。エントリー、発表、勝敗の結果、質疑応答の際の質問は、すべて成績に直結させた。さらに、学生と教員との一对一の関係形成のために大福帳を使用した。大福帳とは、1988年に当時、三重大学教育学部教授であった織田揮準氏によって開発された「出席カード」である¹³⁾。毎回授業終了時に学生がその日の授業に関する意見や要望を記入し、教員が回収する。教員は次の授業までに学生のコメントに対する返事を書き込み、次の授業で学生に返却するものである。本授業でも授業終了時に学生が授業の振り返りを行い、大福帳にコメントを記入する時間を5分程度設けた。特に今回は、学生が大福帳に書き込む内容を授業に関する内容に限定せず、私的な内容でもよいことにした。金西は、学生のコメントすべてに対して、50～100字程度のコメントを記入し、次週の授業開始前に返却し、質問や疑問に関するコメントについては、授業の冒頭

表1 発表テーマとエントリー数

テーマ	エントリー数
1. 徳島大学の広報の特徴・改善点は!?	5
2. メディアのやらせはどこまで許せるか!?	5
3. ネットはバカと暇人のものか!?	9
4. 東日本大震災においてメディアは何だったのか!?	4
5. 【FD特別企画】この授業の良い点、改善点とその改善策とは!?	5
6. Twitterでこの授業の内容をつぶやくのか!?	3
7. 私たちの生活はソーシャルメディアで幸せになれるのか!?	3
8. 非実在青年問題は是か非か!?	6
9. ひこにゃん問題の是非!?	5
10. 【学生持込み企画】マチアソビでオタク文化は徳島を救えるのか!?	1
11. マジコン問題の解決方法とは!?	4

注) テーマ10は学生持込み企画として、学生からメディアに関するテーマを募集し、当該テーマを扱う3週間前の授業で、学生から挙げられたテーマの中から学生の投票によって決定した。



図2 学生の発表の様子



図3 質問する学生の様子



図4 挙手する学生の様子



図5 質疑応答の様子

でフィードバックを行った。これは、上述した木野の言う、双方向のコミュニケーション⁸⁾に当てはまる。図6は、実際に授業で使用した大福帳である(ただし、学生の氏名、学籍番号、アドレスは削除してある)。また表2は、16回の授業の流れを、表3は、学生による発表を実施した日(4~14回目)の授業1コマの流れを表している。

(3) 成績評価方法

成績評価は、以下の得点の合計点によって行った。得点は、同じチームの学生全員に与える「チーム得点」と、学生個人に与える「個人得点」に分けた。表4はチーム得点、表5は個人得点の詳細な内訳である。本授業では、チームによる調査、レジュメ作成等の授業外学習が必要であるため、チームを構成する際には同キャンパスの学生同士でチームを構成する方が、日程調整が容易である。したがって、異なるキャンパスの学生が含まれているチームを特別チームとし、エントリー得点と発表する2チームに選ばれた場合の得点を2点高く設定した。特別チームは、25チーム中15

チームであった。得点の上限は100点とし、100点を超える場合でも100点とした。

(4) 昨年度の授業との変更点

以上の授業設計は、昨年度の授業実践から明らかにされた改善点を踏まえて作成した。昨年度の授業ではコースの中間期に授業の改善点、改善策に関するテーマを取り扱い、アンケート調査を実施し、学生から改善点が挙げられている^{12) 14)}。本授業では昨年度に比べ、いくつかの変更を行ったが、特徴的な変更点としては、以下の4つが挙げられる。

表2 「情報メディアと教育」の授業の流れ

授業回	主な内容
	授業の概要説明、目的の確認
1	授業の進め方について アイスブレイク・チームの仮決定
2	講義「情報メディア概論1」 チームの確定 仮エントリー・授業方法の最終確認
3	講義「情報メディア概論2」 プレゼンテーションの仕方
4~14	各テーマによる発表及び質疑応答
15	期末試験
16	総括授業

表3 学生による発表を実施した日(4~14回目)の授業1コマの流れ

- ・大福帳の返却(授業開始前)
- ・大福帳のコメントに対するフィードバック(10分)
- ・発表できる2チームの選抜結果と選抜した理由の紹介(5分)
- ・2チームによる発表(各チーム5~10分)
- ・質疑応答(30分)
- ・次回のテーマについて解説(10分)
- ・次回のテーマに対するエントリーの確定(5分)
- ・大福帳の記入(5分)

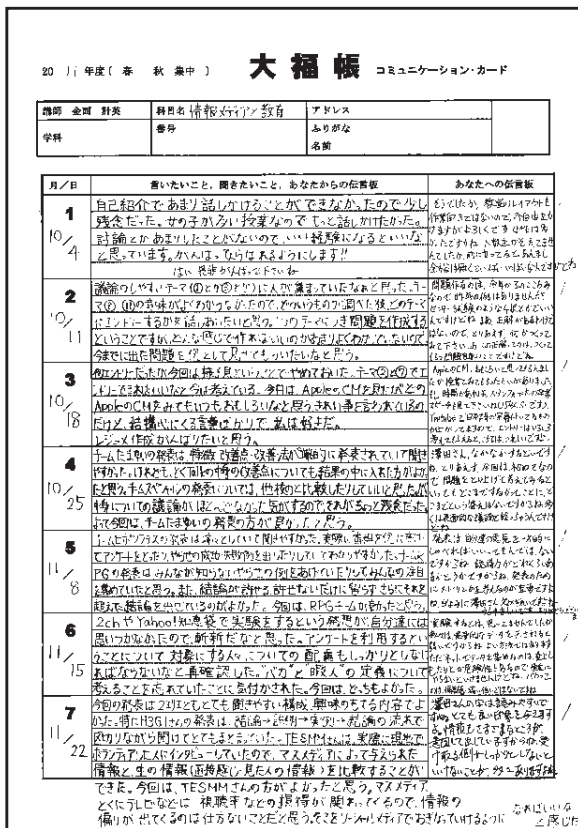


図6 実際に使用した大福帳

表4 チーム得点の内訳

内容	得点
メンバー全員が授業開始時にそろそろ	1点
レジュメ点	1点
発表にエントリーする (最大2回)	7点
問題作成点	0~3点
発表する2チームに選ばれる	8点
発表する2チームから外れたが、優秀なチーム (本授業では佳作と呼ぶ)	5点
発表の指示投票で勝つ	10点

注1) 問題作成点とは、レジュメ提出の際に、テーマに関する期末試験の問題を任意で受け付けており、優れた問題には最大3点までを与えた。

注2) エントリーチームが3チーム以下の場合には競合数が少ないため、発表するチームに選ばれた際の得点は6点とした。

① レジュメ提出期限の延長: 昨年度の授業では、授業の前半で発表及び質疑応答を行い、後半でレジュメ作成を行っていた。そのため、レジュメ作成には十分に時間を取ることができなかつた。本授業では、レジュメの提出期限は当該テーマの授業が行われる前の週の金曜日 17 時としているため、授業外でレジュメ作成のための時間を十分に取ることができた。

② 遅刻者の管理: 昨年度の授業の改善点の中で、最も多く挙げられた意見が「遅刻者の管理を行ってほしい」というものであった。実際に昨年度は遅刻者が多く、学生が発表を行っている際に教室に入ってくる遅刻者も多くいた。改善してほしい理由としては、「授業の途中で教室に入ってくることでモチベーションが下がってしまう」、「遅刻する人に集中力を下げられる」といった意見が挙げられていた。したがって、授業の冒頭でチーム全員がそろっていた場合にチーム得点を1点とし、逆に遅刻者はリストに氏名を記入し、遅刻が3回以上になると、遅刻した学生のみ1点減点することにした。そのため、昨年度に比べ大幅に遅刻者の数が減り、昨年度挙げられた遅刻者に対する不満はなくなった。

③ 得点配分の変更: 表4、表5において示したように細かい設定を行っている。大きく変更した点は、佳作を設けたことである。これにより発

表5 個人得点の内訳

内容	得点
大福帳のコメント	0~3点
質疑応答時の質問	1~3点
期末試験	50点

注1) 大福帳は2行以上記入して1点、さらに量や内容によって最大3点まで加点される。

注2) 質問は1回につき1点、質問内容・回数によって最大3点まで加点される。

注3) 期末試験は50点満点で実施

表できるチームは2チームだけであるが、レジュメが優秀であれば何チームでも成績に関わる評価がなされるようになった。後で紹介するが、実際に発表、または佳作に選ばれることが、授業外学習を行う動機として挙げられていることが分かっている。また、期末試験の得点を昨年度は100点満点であったものから、今年度は50点満点とし、レジュメ作成や授業への参加に対する評価を重視することとした。

④ 授業開始時の説明を徹底: 本授業はチーム制であって、特殊な方法を取り入れているため、第1回目の授業での説明を徹底し、授業外学習の意義、チーム制の理由なども詳しく説明した。その後、学生に受講するか否かを判断させ、受講する以上はしっかりやってほしい旨を伝えた。このことで、実際に30名ほどが受講を取り辞めている。さらに、第2回目の授業においても、第1回目の授業を欠席した学生に対する説明と、念押しの意味を込めて再度、意図説明等を徹底した。

4. 学生の授業外学習

(1) 分析に用いたデータ

本授業では、コースの中間期にあたる第8回目の授業で、この授業に対する学生自身の取り組み方、授業外学習などを問う学生アンケート(以下、本年度のアンケート)を実施し、90名の学生から回答を得た。また、昨年度の授業においても同様のアンケート(以下、昨年度のアンケート)をほぼ同時期の第9回目の授業で実施しており、85名の学生から回答を得ている。これらのアンケー

トは、5件法による選択式の設問と具体的な内容を記述する設問で構成されている。ここからは、両アンケートの結果を分析しながら、本授業での学生の授業外学習について明らかにしていく。

(2) 授業外学習時間

はじめに授業外学習時間について、本年度と昨年度との比較を行う。「この授業では、他の授業に比べて、授業以外での学習（調査、実験、レジュメ作成、発表準備を含む）をよく行ったと思うか？」（5件法）という設問に対して、本年度のアンケートでは6割以上の学生が、昨年度では約半数程度の学生が、とてもそう思う、またはどちらかといえばそう思うと回答している（図7,8）。グラフの数値から、本年度は昨年度に比べ、ポイントの向上が見られるが、実際にt検定を実施した結果、有意差が見られることも分かった（ $t(173)=-3.25, p<.01$ ）。また、「授業以外での学習（調査、実験、レジュメ作成、発表準備を含

む）を、1週間で平均してどのくらい行っていましたか？」という設問（時間数を記述させる設問）では、エントリーした時の1週間では、平均して1人当たりの授業外学習時間は、昨年度が約3時間であったものが、本年度では約5時間に伸びている。表6は学習時間の分布を表しており、学生個人の授業外学習時間も増加していることが分かる。

(3) 授業外学習を行った理由

次に、授業外学習を行った理由を見ていく。本年度のアンケートの設問「この授業では、他の授業に比べて、授業以外での学習（調査、実験、レジュメ作成、発表準備を含む）をよく行ったと思うか？」において、とてもそう思う、またはどちらかといえばそう思うと回答した学生に、その理由を記述式で問うた。その記述の中から本授業で取り組んでいる方法、内容に関する部分を抜き出し、カテゴリーごとに分類した。理由が具体的に記述されていた回答は57名であり、抜き出した部分は全部で74であった。なお、データ数からもわかるように、1人の記述から複数のカテゴリーに属す部分が抜き出されている。表7は、カテゴリーと抜き出された部分の数を表している。また、今年度のアンケートでは、エントリーを行っ

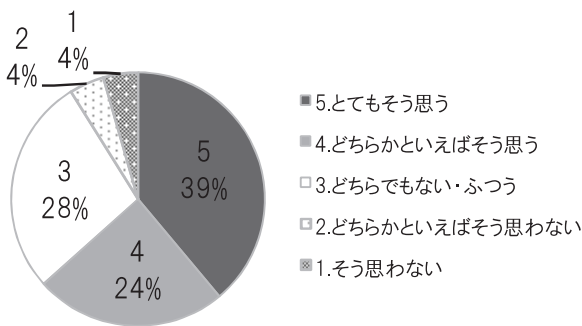


図7 この授業では、他の授業に比べて、授業以外での学習（調査、発表準備等を含む）をよく行ったと思う（本年度のアンケートより）

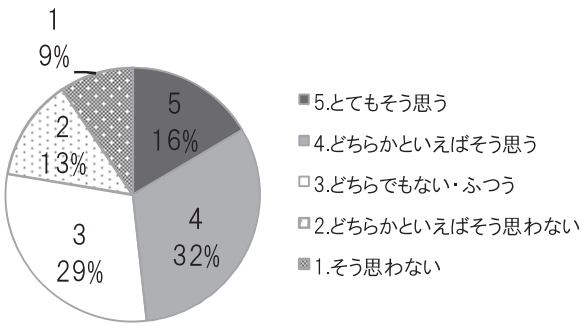


図8 この授業では、他の授業に比べて、授業以外での学習（調査、発表準備等を含む）をよく行ったと思う（昨年度のアンケートより）

表6 エントリーを行った時の1週間の授業外学習時間

授業外学習時間	本年度 人数(人)	昨年度 人数(人)
15時間	2	0
11時間～15時間未満	4	0
9時間～11時間未満	4	0
8時間	4	5
5時間～8時間未満	21	11
3時間～5時間未満	17	21
2時間・2時間30分	10	12
1時間・1時間30分	8	17
1時間未満(0分を含む)	3	6
無回答	17	13

注) データ数は今年度90名、昨年度85名であり、無回答を除く学生の授業外学習時間の年度ごとの平均は、本年度5時間3分、昨年度3時間3分であった。

表7 他の授業に比べて、授業以外での学習をよく行った理由

理由	件数
レジュメを作成するため	38
自分で知識習得、調査を行うため	16
発表できるようにするため	5
メディアに対する興味から	2
他の授業と比較した場合、本授業ではよく学習を行ったといえる	13

注) データ数は57名分であるが、複数のカテゴリーに属す記述があるため、件数の合計は74である。

表8 エントリーを行っていない時の1週間の授業外学習時間(本年度)

授業外学習時間	人数(人)
5時間	7
4時間	1
3時間・3時間30分	14
2時間・2時間30分	18
1時間・1時間30分	27
1時間未満(0分を含む)	16
無回答	7

注) 無回答を除く学生の授業外学習時間の平均は、1時間53分であった。

ていない時の1週間の授業外学習時間も調査しており、エントリーした時に比べれば少ないものの、始めに示した授業外学習の全国的調査におけるデータに比べれば、授業外学習時間の長い学生が多いことが分かる(表8)。

5. 考察

(1) 本授業で授業外学習時間が伸びた要因

以上の結果から昨年度の授業に比べ、今年度は授業外学習時間が大幅に伸びていることが分かる。ここからは、今年度のアンケートにおける学生の記述を見ていくことで、授業外学習時間が伸びた要因を明らかにしたい。まず、表7の結果からレジュメの作成が授業外学習を行う動機として最も大きいことが分かる。レジュメはテーマに関する内容をまとめることが課せられているだけで、細かい内容、学習しなければならない項目

については、特に指定せず学生に任せてある。しかし、実際には我々が気付かなかった資料を収集したり、最低限押さえていなければならない事項は学習されていた。もちろん、知識に不足がある場合や誤りがある場合については、授業の中で補足説明、訂正などを行っている。さらに、自身の結論を裏付けるための調査、実験を行い、学術的にまとめたレジュメを作成するチームもあった。この要因を見るために57名の学生の記述の中で「①レジュメを作成するため」、「②自分で知識習得、調査を行うため」、「③発表できるようにするため」に分類された部分の重複数を見てみる。すると、①と②に重複する部分の記述があった学生は12名であり、①と③に重複する部分の記述があった学生は5名であった。このことからレジュメ作成に時間をかけ、知識習得、調査、実験等を行う要因として2つのことが言える。1つ目は、他の学生と競うことで優秀なレジュメは評価され、発表することができ、その評価は成績に直結している点である。具体的な記述としては、「発表枠を取りたいので予習したり、調査する」などが挙げられる。2つ目は、与えられた内容を学習するのではなく、自分自身で主体的に取り組むことができる点である。具体的な記述としては、「レジュメを作成するためには自分自身がちゃんと知識を持っていなければいけないので」などが挙げられる。実際に昨年度の授業における調査で、「学生が主体的に取り組むことができる」ことが授業の良い点として最も多く挙げられていた¹²⁾。さらに、「レジュメを作成するため」を挙げている学生38名の中で、チームで課題に取り組むことを記述している学生が9名であった。具体的な記述として、「グループの人と集まって意見交換ができる」といった協働学習の効果や、「チームの人たちが頑張っているので、自分だけサボれない」といった連帯感としての意識が働いていることもわかる。

このように、本授業では授業方法、評価方法によって、より優秀なレジュメを作成したいという動機に繋がっており、そのための授業外学習が行われていることがわかる。特に、昨年度と大きく変更した点の1つに、レジュメ提出期限の延長が

あるが、このことによって、レジュメ作成が授業外で可能になった点が、大きく授業外学習を伸ばすことに寄与していると考えられる。また、授業の進め方だけでなく、その意図説明、授業外学習の意義を始めに説明したことも大きいと考えられる。なぜなら、昨年度と比べると、履修者に対する出席率は高く、途中から授業に出席しなくなる学生数は少ないことが、授業実施者の視点から見て取れる。

一方で、表7の「他の授業と比較した場合、本授業ではよく学習を行ったといえる」というカテゴリーに属す記述をした学生が13名であることがわかる。具体的な記述として、「他の授業では特に予習などしていない」、「他の授業では授業外の学習はあまりしていない」が挙げられる。このことから、始めに述べた全国調査と同様に、学生は大学の授業において、授業外学習をほとんど行っていない現状が見えてくる。現在の大学においては、学生の自主的な学習のみに任せ、学生の授業外学習を促進するための工夫を行わなければ、ほとんどの学生は授業外学習を行わないことが推察される。ただし、ここで筆者らが述べている、学生の授業外学習を促進するための工夫とは、本授業のような方法のみを指すのではなく、池田ら¹⁵⁾、佐藤ら¹⁶⁾が示しているような、授業の中で簡単に導入できる工夫のことを指している。

(2) 本授業の目的の達成

本授業は授業外学習を促進させる授業方法として1つの成果があったと考えられる。しかし、本来の授業の目的である「現代メディアの位置づけについての理解」及び「メディアリテラシー」に関する知識習得が学生にあったかどうかを検証することも忘れてはいけない。本年度のアンケートでは、「これまでこの授業を受けてきて、現代のメディアについて興味を持つことができたと思うか？」(5件法)という設問に対して、約7割弱の学生がとてもそう思う、またはどちらかといえばそう思うと回答している(図9)。また、大福帳のコメントでは、「個々のメディアが役割を持つことの重要性を知った」、「質問の答えを聞いていると調べている内容が深く知恵を増やしてもらいました」、「ソーシャルメディアを使

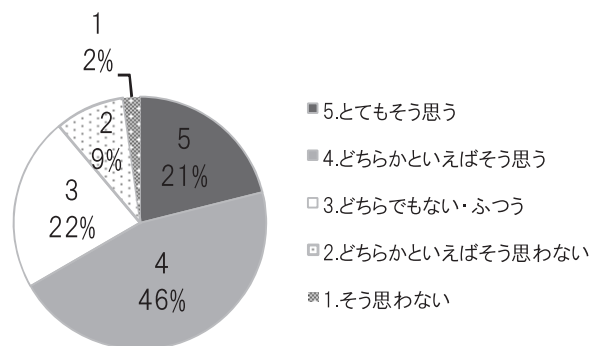


図9 これまでこの授業を受けてきて、現代のメディアについて興味を持つことができたと思う

う私たちの使い方が幸せになれるかどうかに関わってくる」など、毎回のテーマに関する気づきやメディアリテラシーの大切さなどが記述されている。このことから、すべての学生が目的を達成しているとは言い難いが、概ね授業の本来の目的についても達成できているのではないだろうか。ただし、教育の質保証の観点から見れば、内容の理解に関する厳密な測定をしなければならないことは、言及しておく。

6. まとめ

本研究では、本年度の授業において、昨年度と同授業における同時期の同調査に比べ、学生の授業外学習時間が大幅に伸びていることが明らかになった。この要因として、①チーム学習の効果、②レジュメ作成等の知識習得、調査を授業外で行うこと、③テーマを与え、学習内容、量、調査、実験などを学生の主体性に任せ、チームで競わせる授業方法、④明確な成績評価方法、基準の提示、⑤授業外学習の意義、授業方法の意図説明を明確に行うことが挙げられる。今回明らかになった5つの要因を、各教員が自身の授業で、実際に活用できる実用的な示唆として捉えるためには、さらなる検証が必要であろう。また近年では、教育の質保証の観点から、学生の学習成果(ラーニング・アウトカム)が注目を集めている。我々の実践研究においても、今回は授業外学習時間に焦点を当てたが、今後は授業外学習の量だけでなく、質を問う必要性が出てくるであろう。現在の高等

教育における諸問題を解決していくためには、国、大学、学部、学科、教員個人がそれぞれの立場で主体的に、教育に取り組み、その効果検証を繰り返すことが重要である。

参考文献

- 1) 文部科学省：学士課程の構築に向けて，中央教育審議会答申，2008
- 2) 谷村英作：大学生の学習時間と学習成果，大学経営政策研究，1，69-84，2011
- 3) 電通育英会，2010，大学生のキャリア意識調査，電通育英会，
<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/2010.html> (2011年12月31日)
- 4) Benesse 教育研究開発センター：大学生の学習・生活実態調査報告書，ベネッセコーポレーション，2008
- 5) 葛城浩一：学習経験の量に対するカリキュラムの影響力，広島大学大学院教育学研究科紀要，第3部57，133-140，2008
- 6) 山田浩之：学生の学習行動，広島大学教育叢書，90，11-23，2007
- 7) 岡田有司・鳥居朋子・宮浦 崇・青山佳世・松村 初・中野正也・吉岡 路：大学生における学習スタイルの違いと学習成果，立命館高等教育研究，11，167-182，2011
- 8) 木野 茂：教員と学生による双方向型授業，京都大学高等教育研究，15，1-13，2009
- 9) 澤田忠幸：多次元的な“学生による授業評価”活用の有効性，大学教育学会誌，31，132-139，2009
- 10) 溝上慎一：「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討，京都大学高等教育研究，15，107-118，2009
- 11) 清水 亮・橋本 勝・松本美奈：学生と考える大学教育，ナカニシヤ出版，2009
- 12) 吉田 博・金西計英：双方向型授業の取り組みにおける成果と課題，大学教育研究ジャーナル，8，128-137，2011
- 13) 織田揮準：大福帳による授業改善の試み，三重大学教育学部研究紀要，42，165-174，1991
- 14) 吉田 博・金西計英：コースの中間期に実施

- する自身の授業における授業改善，大学教育学会第33回大会発表要旨集録，128-129，2011
- 15) 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹：成長するティップス先生，玉川大学出版部，2001
 - 16) 佐藤浩章（編）：大学教員のための授業方法とデザイン，玉川大学出版部，2010